



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	福田恒存の個人観の考察 : 政治批評としての清水幾太郎批判を中心に
Author(s)	村部, 貴浩
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 29, 21-36
Issue Date	2019-10-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75964
Type	departmental bulletin paper
File Information	021-036-02_Murabe.pdf



福田恒存の個人観の考察

—政治批評としての清水幾太郎批判を中心に—

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程

村部 貴浩

abstract

An Analysis of Fukuda Tsuneari's Perception of the Individual — The Political Critique of Shimizu Ikutaro

MURABE Takahiro

Fukuda Tsuneari has been perceived to be one of the leading post-war conservative thinkers in Japan. However, he also placed more emphasis on the importance of an individual in nation and society in contrast to other conservative thinkers in the country.

In this article, I focus on some aspects of his emphasis on the importance of an individual, which has not been yet explored in previous research. I mainly discuss Fukuda's critical paper on Shimizu Ikutaro, "Critique of a modern Japanese intellectual, Shimizu Ikutaro", who published a paper "The choice of nucleus, Japan be a nation", in 1980, which indicates his turn to a rightist nationalism from liberalism in his political thoughts. This article examines Fukuda's perception of individualism which is revealed in his critical work on Shimizu.

0 問題の所在—福田恒存の個人観

戦後日本の保守思想において、福田恒存の存在が非常に大きく重要であった、ということは以下に引用する多くの有識者が述べてところである。中島岳志は福田について、「戦後日本の保守思想家のビッグ2は福田恒存と西部邁である」¹「福田恒存という人は、近代日本に現れたはじめての本格的かつ自覚的保守思想家だったのではないか」²と評価している。

西部邁は福田について、「大方の保守派は進歩派が倒れるとともに倒れるような反立の存在にすぎない。(……) 福田氏が選びとってきた保守の立場はこれらと異なって、人間および社会のはらむ矛盾と逆説のただなかにおいて平衡をとろうとする営為のことであり、氏がかたくなに伝統の保守をいうのも、それが精神の平衡術において不可欠の要素であると思えばこそである」³と、保守主義と伝統の観点から評価している。また、川久保剛は福田の保守主義観について「過去の教訓に学ぼうとする。謙虚であろうとする。ゆっくり歩もうとする。自問自答を忘れまいとする」⁴と、経験則を重視した漸進主義的な保守主義者として評価している。

宇野重規は福田について、「革新主義や進歩主義を批判し続けた福田であるが、かといって、日本における文化の連続性について、けっして楽観していたわけではない。(……) むしろ日本における伝統の不在を嘆いた」⁵と述べている。さらに、福田と丸山眞男について、「両者はともに、日本の歴史を貫く思想的連続性の欠如に着目し、結局のところ、明確な伝統が形成されなかったとする点で一致している」⁶と、戦後進歩派の代表者と目される丸山と戦後保守派の代表者と目される福田という、一見したところ対照的で相対するとみられる両者の共通性という視点から福田について論じている。

有識者による福田の評価について、浜崎洋介は「その活動と影響の広さにおいて戦後特異な存在であった福田恒存は、しかし、長く毀誉褒貶に曝され続けており、いまだに安定的な評価が確立されているとは言えない」⁷と述べ、その評価の定まらない理由について、「批評家、演劇家、翻訳者などの顔を持ちながら戦後最大の保守派論客としても注目を集めてきたという福田の履歴は、その統一した全体像を容易に描かせず、その評価をも極端に分けてしまうという性格を孕み続けてきたのだ」⁸と分析している。

また、福田についての検討が十分に進められてこなかったもう一つの事情として、次のような問題がある。戦後の進歩派絶対優位の思想的状況下において、福田は「平和論の進め方についての疑問」(『中央公論』1954年12月号)という論文を発表した。さらに福田は、60年安保闘争の際に丸山の非武装中立論を武力なしで平和を保つことはできないという趣旨で批判した「常識に還れ」(『新潮』1960年9月号)という論文も発表した。これらの評論から先にみた保守派からの福田賛辞の評価とは対照的に山田宗睦は「危険な思想家」⁹、安丸良夫は「ナショナルインタレストを露骨におしだして、平和主義

▶1 西部邁・中島岳志『保守問答』講談社2008年 4頁

▶2 前掲注1 245頁

▶3 西部邁『ニヒリズムを超えて』日本文芸社1989年 150頁

▶4 川久保剛『福田恒存』ミネルヴァ日本評伝選2012年 217頁

▶5 宇野重規『保守主義とは何か』中公新書2016年 161-162頁

▶6 前掲注5 163頁

▶7 浜崎洋介『福田恒存思想の〈かたち〉』新曜社2011年 9頁

▶8 前掲注7 9頁

▶9 山田宗睦『危険な思想家 戦後民主主義を否定する人びと』光文社1965年 15頁

- ▶10 安丸良夫「戦後イデオロギー論」
『講座日本史8』東京大学出版会
1971年 279-280頁

と国際主義を批判した先駆者」¹⁰といった悪評を浴びせた。当時、保守的な言説を発することはリスクを伴うものであり、福田にたいして保守反動のレッテルがはられることにもなった。

福田は、多くの保守派から賞賛され、いわば神聖視される一方で、左派・革新派からは保守反動の思想家として強い批判にもさらされてきた。このような毀誉褒貶のゆえに、むしろ福田の冷静な評価は妨げられてきたといえよう。

以上の状況に対して、本稿では保守や左派といったイデオロギー論だけに収れんし得ないイデオロギーを横断するかにみえる論点を設定することで、福田の思想の独自性に接近したい。それは福田における個人の問題である。そもそも保守の一般的概念からすれば、個人に対して国家が優先されるのが通例であろう。その実例として、以下に橋川文三の保守主義観を引用する。

橋川が「日本における近代的保守主義は、思想伝統としても、政治的伝統としても、安定した実体を形成しなかった。(……) 近代日本が明治開国にさいして選びとったものは、強力国家という権力原理」¹¹と指摘するように、日本の近代的保守主義はその歴史的経緯から富国強兵のスローガンに代表されるような強力国家の形成というものと密接不可分な関係にあり、それ故、日本における保守主義者は国家を重視し、個人を国家に劣後させる傾向があったといえる。

しかし、福田は橋川の指摘する近代的保守主義と異なり、個人を重視する思想家であった。その個人観は、過度な個人の自由を提唱するリベラリズム的な個人観でも、マルクス主義やファシズムのように全体の中に埋没してしまうような個人観でもなく、単なるアトムとしての個人にならぬよう、個人的自己の存在の拠り所を過去の歴史とのつながりにもとめるのが福田の個人観であったと思われる。

福田の個人重視の思想が顧みられてこなかった最大の要因として、先にみた保守反動の思想家といった福田への評価が左派・革新派はおろか保守派においてさえも根強く、福田の個人観の考察ということが看過されてきたといえるのではないだろうか。この看過により、福田の思想が正しく理解されずに毀誉褒貶にさらされ安定的な福田評価に至っていない、という問題が生じているといえるであろう。本稿は、先行研究では明らかにされていない福田の個人重視の側面を考察したい。なぜなら、戦後保守の代表者と目される福田が、国家重視の保守派に対するリベラル派の個人重視という図式では回収され得ない思想を持っていたことを指摘することで、福田研究のみならず保守思想を理論的に考察する上でも貢献ができると考えられるためである。

福田の先行研究について、もっとも包括的になされたものに浜崎洋介の福田研究があるが、しかし、福田の個人観を正面に見据えて十分に検討した研究は、浜崎も含めて今のところみあたらない。

本稿の目的は福田の個人観を解明することである。従前の福田理解によれば、第2章で考察する清水のように国家を重視し、国家という「公」に貢献するための個人を第一義的に考えるような保守主義者と福田も同視されてきた。しかし、福田の思想は国家との関わりにおいて個人を重視し、国家を超

- ▶11 橋川文三編『保守の思想 戦後
日本思想体系7』筑摩書房1968
年 20頁

える個人をも認めており、その意味でいわば「リベラルをも内包した保守主義」とでも形容し得るような思想を有していたと思われ、従前の保守反動思想家といった紋切型の福田像の修正に努めたい。

浜崎は「個人」の側から福田恒存の政治を問おうとしたとき、戦後の「政治と文学」論争のなかで書かれた「一匹と九十九匹と一ひとつの反時代的考察」（昭和二十一）は無視できない¹²と、福田の個人観に関連して、このように述べており、本稿の主題である福田の個人観をさぐる上で、浜崎の指摘するように、「一匹と九十九匹と」における福田の問題意識は重要かつ密接な関連性を有していると思われる。

本稿は、第1章にてまず「一匹と九十九匹と」の考察から始めることにする。それは、戦後すぐに書かれた同論文は、きわめて明示的ではないにしても、第2章で考察する1980年に発表された清水批判の論文で主張されている福田の個人重視の思想の萌芽がみられ、本稿の主題と密接な関連性を有していると考えためである。

そして、第2章では、福田の個人観をさぐる具体的な事例として、「（核の選択）・日本よ国家たれ」という論文を発表した清水幾太郎にたいする福田の清水批判の論文である「近代日本知識人の典型清水幾太郎を論ず」を主に検討する。当該論文は福田の個人観が顕著に示されており、本稿の主題上、有意義な考察と思われるため、当該論文を主に検討することによって、福田の個人観を浮き彫りにしたい。

1 福田における政治と文学について —「一匹と九十九匹と」—

福田は、戦後すぐに政治と文学との関係について論じた「一匹と九十九匹と」（『思索』1947年春季号、三月刊）において、「文学と政治との対立の底には、じつは個人と社会との対立がひそんでいるのである。ここでもひとびとはものごとを一元的に考えたがり、個人の側にか社会の側にか軍配をあげようところみてきた」（一647-648）と、政治と文学との対立、個人と社会との対立関係について述べている。

「一匹と九十九匹と」は「ひとつの反時代的考察」という副題をおいている。福田はこの副題をどのように意図していたのであろうか。福田は以下のように書いている。「現代の風潮は、その左翼と右翼のいずれを問わず、社会の名において個人を抹殺しようともくろんでいる。ゆえに個人の名において社会に抗議するものは、反動か時代錯誤のレッテルをはられる。ここにぼくの反時代的考察がなりたつ」（一648）と、「一匹と九十九匹と」の主題である文学と政治の対立の根底には、個人と社会の対立があり、そして右翼に限らず、戦後優勢な左翼思想ですら個人をないがしろにする風潮であり、そのような時代状況の中で福田が個人の立場から社会に疑義を表明する、異議を申し立てることを反時代的考察としているのではないだろうか。

▶12 福田恒存・浜崎洋介編『国家とは何か』文春学藝ライブラリー
2014年 339頁

福田は「ぼくは文学者として政治に反発する。政治がきらいだからでもなく、政治を軽蔑するからでもない。政治に対するぼくの反発は政治の否定を意味するものではない。それは政治の十全な自己発揮を前提としている。政治のことばで文学を語る危険をおそれたと同様に、文学のことばで政治を語る愚劣をおそれた」（一643）と、文学と政治との対立について、その役割の峻別をはかっているといえるであろう。

さらに、福田は「ぼくはぼく自身の内部において政治と文学とを截然と区別するようにつとめてきた（……）なんじのうちだれか、百匹の羊をもたんに、もしその一匹を失わば、九十九匹を野におき、失せたるものを見いだすまでたづねざらんや。（ルカ伝第十五章）（……）このことばこそ政治と文学との差異をおそらく人類最初に感取した精神のそれである。かれは政治の意図が「九十九人の正しきもの」のうえにあることを知っていたのにそういない。かれはそこに政治の力を信ずるとともにその限界を見ていた。（……）九十九匹を救えても、残りの一匹においてその無力を暴露するならば、政治とはいったいなにものであるか」（一644）と、聖書のルカ伝を政治と文学の峻別の物語ととらえ、政治が果たすべき役割とその限界、同時に文学の果たすべき役割とその意義について述べており、この役割の峻別はマルクス主義やファシズムが台頭した20世紀にも当てはまる根源的な問題であるといえるだろう。しかし、福田は文学者について、「阿片でしか救われぬ一匹の存在にこだわる一介のペシミストでしかない」（一653）とも形容している。浜崎は「政治は、科学と同様、「知性や行動」で物質的社会的解決を図る営みである以上、その「知性や行動」それ自体を方向付けている「思想や個性」、あるいは、取り返しのつかないこの人生を生きる「失せたる一匹」の問題を扱うことはできない¹³と、一匹を救い得ない政治の限界について指摘している。

福田は、失せたる一匹の無視ということは有史以来の根源的な問題ではあるが、現代においてはそれが顕著となり、なおかつそれが正当化されているということを、善き政治と悪しき政治を例に出して、現代の大多数と進歩における一匹の存在の困難について以下のように述べている。「失せたる一匹の無視せられることはなにも現代にかぎったことではない。が、それはつねにやむをえざる悪としてみとめられてきたのであって、今日のごとく大義名分をもってその抹殺を正常化した時代は他になかった」「善き政治はおのれの限界を意識して、失せたる一匹の救いを文学に期待する。が、悪しき政治は文学を動員しておのれにつかへしめ、文学者にもまた一匹の無視を強要する。しかもこの犠牲は大多数と進歩との名分のもとにおこなわれるのである」と、福田は「人間のうちにひそむ個人的自我と集団的自我との矛盾をそのまま容認し、相互肯定によって生かそうとする」（一648、644、653）とも述べており、この個人的自我と集団的自我との関係は、一匹と九十九匹との関係と捉えられるであろう。

浜崎は「二十世紀、この社会との連関を失った「個人」の「不安とうしろめたさ」の隙に付け入って、左の Kommunismus と右の Faschismus が、その政治的解決をめぐる覇権を争うことになる。ここに、九十九匹から離脱しては、その「空虚」に耐え得ない「個人」の無力がある¹⁴と、当該主題とコミュニ

▶13 福田恒存・浜崎洋介編『保守と何か』文春学藝ライブラリー
2013年 383頁

▶14 前掲注13 383頁

ズム・ファシズムが生成する密接な関連性について述べており、福田は、近代合理主義・理性主義を絶対なものとするのではなく、懐疑し、社会学などの領域において個人が集団性へ埋没してしまうことへの警笛を鳴らしている。

以上、第1章をまとめるならば、「一匹と九十九匹と」やその他の著作から福田がいかに個人を重視していたかがわかる。それではこの福田が重視していた個人とは何か、ということについて次章にて考察する。

この福田の問題意識を探る具体的な事例として、次章では清水幾太郎批判を考察したい。1954年に発表した「平和論の進め方についての疑問」以降、福田は進歩的文化人の言説を主な批判対象としてきたが、80年代以降は主な批判対象を保守派の言説へと転じ、その端緒となったのが清水批判の論文であった。同論文では清水の個人なき国家観の主張が批判されており、国家重視には還元できない福田の個人観が顕著に示されているため、本稿の主題を考察する上で好事例であると考えらる。

2 清水幾太郎批判にあらわれる福田の個人重視の思想

福田の清水批判を検討する前に、戦後の「一般的な保守思想家」というのはいかなる思想を有していたのであろうか。小熊英二によれば「一九五〇年代のオールド・リベラリスト（その定義は、「戦前の中産階級の安定した生活のなかで自己形成をとげ、そこで培った価値観や生活感覚を基盤にして、戦後の社会変動を批判した」¹⁵）たちは、「個人の自由」をさかんに強調した（……）マルクス主義を、「個人」を無視する全体主義思想だと批判した」¹⁶と述べており、この背景には、前章でみたとおり戦後のマルクス主義思想が趨勢の時代状況において、保守主義者は同思想への警戒、対抗から「個人の自由」を喧伝したといえることができるであろう。しかし、60年安保闘争を経て、日本が高度経済成長を迎えるに至って、次第に社会主義・共産主義革命の実現可能性が薄れるにつれ、同思想への脅威が減退し、多くの保守派は従前の個人重視から個人の放縦な自由を抑制し、こと80年代を迎える頃には清水にみられるごとく「公」の必要性を説いて、国家に貢献することをよしとする言説が「一般的な保守思想家」の主流な思想に変容した。

本節にてくわしくみるが、清水は「人間は、例外なく、相当程度まで利己的なものである（……）人間の利己的活動には自ら限界が設けられる」¹⁷と国家、公による個人の我執の抑制を想定した言説をしており、福田のように80年代においても個人を重視していた保守思想家は異例であったといえる。

先述の「平和論の進め方についての疑問」について、当初福田は、「平和論に対する疑問」というタイトルにしていたが、当時の言論状況を考慮して、上記の婉曲なタイトルに変更された経緯がある¹⁸。内容的には、進歩派における平和論の不見識、迷妄についての批判であったが、当時の言論状況から非難的にされた。そして、上記、国防論を発表してから26年後、時代状況

▶15 小熊英二『民主と愛国』新曜社 2002年 714頁

▶16 前掲注15 200頁

▶17 清水幾太郎「核の選択」『諸君』1980年7月 41頁

▶18 前掲注4 205頁

は大きく変化し、国防論を喧伝する保守派が隆盛をむかえる中で、福田は国防強化を唱える論文をあらわした清水幾太郎を『中央公論』1980年10月号において、「近代日本知識人の典型清水幾太郎を論ず」（以下「福田の論文」という。）というタイトルの論文で批判している。福田が当該批判をするにいたるその発端は、1980年7月号の『諸君』に清水が「(核の選択)・日本よ国家たれ」という論文（以下「清水の論文」という。）を掲載したことによる。清水は従前、進歩的文化人とみられ、戦後、二十世紀研究所、平和問題談話会を設立し、反基地闘争を行った。サンフランシスコ講和条約では全面講和の立場をとり、60年安保闘争では全学連主流派を支持した。そのような清水が1980年に先述の論文を発表したのは思想的な転向と一般にはみられた。

福田は清水の論文について、「私の読後感は不快感の一語に尽きる。怒りではない、寧ろかつての友人、先輩に対する同情を混えた嫌悪感である」（七543）と痛烈な批判を浴びせている。そして、同論文においては、清水が国防強化のための「公」の必要性を説き、国家に埋没してしまうような個人観を示していることにたいする福田の個人重視の思想が顕著に示されており、本章では同論文を主に考察することによって、福田の思想の解明に努めたい。

第1節では、福田は清水の国家の中に埋没してしまうような弱い個に批判的であり、国家というものを造上げる集団的自己の原動力を個人的自己という強い個の存在に求め、強い個の存在の必要性を論じた、ということを考察したい。

第2節では、第1節において強い個の存在の必要性を論じたが、その強い個の存在を支える基盤足り得るものとは何かを問うている。それは「善き人間」という存在であり、善き国民とは異なる「善き人間」という存在のために「良心への忠誠心」の必要性を説いており、その良心というものは何を拠り所しているのか、そしてその関連でそれぞれ消費者、職人、農民という個人を通して、福田が重視している個人とはいかなるものかについて考察したい。

2.1 国家・社会と個人

福田は国家について、「人は抽象概念としての国家に愛情を持つ事は出来ませんし、また単なる過去の遺産に対する憧れは力としての愛国心には結集しません。もしそれを強要すれば、所謂ウルトラ・ナショナリズムという国粹思想が復活する事は火を見るよりも明らかであります」（六42）と、過度なナショナリズム、国粹主義をよしとしておらず、国家とは決して個人とかかけ離れた抽象的存在でも無機質な存在でもなく、個人と国家との具体的で有機的な関連性を求めていたといえ、その意味で本章にて考察する清水の国家観・個人観に懐疑的であったといえる。

福田は、清水批判の論文において、「国家もフィクションなら、人格もフィクション（……）「拵え物」には違いないが、「創造物」であり「建造物」である。（……）問題は、すべてはフィクションであり、それを協力して造上げるのに一役買っている国民の一人、公務員の一人、家族の一人という何役かを操る自分の中の集団的自己を、これまた一つの堅固なフィクションとしての統一体たらしめる原動力は何かという事である。それは純粋な個人的自己

であり、それがもし過去の歴史と大自然の生命力に繋がっていなければ、人格は崩壊する。現代の人間に最も欠けているものはその明確な意識ではないか」(七576)と、個人と国家とのあり得べき関係について述べている。

福田は、国家も人格もフィクションであるといった上で、そのフィクションを造上げるために各人がそれぞれの役割を果たすことを集団的自己と規定し、この集団的自己に実体性を持たせる存在を純粋な個人的自己であるとして、個人の存在の重要性を説いている。この福田の個人と国家観は、やはり前章で考察した「一匹と九十九匹と」で示した問題意識の延長線上にあると思われる。集団的自己という九十九匹と、集団的自己だけでは還元し得ない個人的自己という一匹の関係である。

福田は「人間一人一人の中には様々の集団に適合する様々の集団的自我があると同時に、それには絶対に応じまいとする純粋な個人的自我がある。(……) 集団的自我だけで生きるのが「合理主義的」だと考え、それに合わない個人的自我の残存は「感情的」「習慣的」な意味のないものとして、みづから採りあげようとしなくなる。馬鹿馬鹿しいことだが、マルクス主義、共産主義はここ何十年間、日本の知識人にそういう「自己批判」の手口を教えこんできたのだ」(五216-217「政治主義の悪」『読売新聞』1960年8月15-17日)と個人的自我を軽視するマルクス主義思想に疑義をあらわしている。

福田がいうように、人間というものは、一般に私心と公共心という二面性をあわせ持った存在ということができるであろう。マルクス主義・左翼思想は、人間の公共性のみを取り出し、福田がいうところの集団的自我としての人間性にのみ着目し、そのような人間像が近代的な合理主義・理性主義に則した人間像であると考えた。一方、個人的自我というのは、反近代的な未発達で因習的な人間像であると捉え、克服すべき対象とした。先述したように個人的自我(一匹)こそが、集団的自我(九十九匹)を機能せしめる原動力と考える福田にとって、マルクス主義・左翼思想の全体の中に埋没してしまうような個人観は容認し得ぬものであり、ここに同思想にたいして福田が懐疑的・批判的な最大の論拠があるといえるのではないだろうか。

福田は清水の国家観について、「人間を社会的動物と見なし、個人を超えるものとしての集団を認めながら、集団を超える個人を認めない社会学者の口から「日本よ、国家たれ」と言われれば、どうしても全体主義しか考えられない。共産主義国家のそれではないが、善くも悪くも、それは個人と国家との馴合いでしかない、甚だ日本的な一元的、家族主義的な国家観」であると述べ、さらに、「敗戦後、徒に個人をのさばらせ国家を否定してきた戦後の風潮の反動として、いきなり個人を部品として国家の中に埋没させて済ませていられるのも、氏の国家観に個人という要素が欠けているからではないか」(七577-578)と述べている。

福田は戦後、進歩派知識人を中心に国家を否定し個人をのさばらせてきた「戦後の風潮」にたいして懐疑的ではあり、その点では通常の保守派と同様の認識であるが、しかし、同時に清水の国家観に個人の要素が欠けている、個人と国家との馴合い、と非難しており、先述の純粋な個人的自己確立の必要性を唱えていることから個人を重要視していると思われる。

清水は「国家というものを煎じつめれば、軍事力になり、軍事力としての人間は、忠誠心という人間性に徹した存在でなければならぬ」¹⁹と述べている。

これにたいし福田は「押し付けがましい煽ての響きを感じる。(……) 忠誠心も人間性なら、利己心も同じく人間性である、(……) ただ「忠誠心」一途に、己れを空しうして天使と綾取りでもしているというのは所詮無理な話であり、その羨望、嫉妬という人間本来の利己心を抑えるのは忠誠心ではなく、やはり合理的な組織の規律と、それに対する組織人としての自制心である」(七574) と、清水の考える忠誠心と異なり福田は、個人と国家との関係について、人間の本来的に有する利己心の観点からその実現可能性に疑義をあらわし、自律した自己確立を求めているといえる。

福田は「善き人間（個人）は必ずしも善き国民ではなく、またその逆も真であるという事実である。(……) 組織、集団の一員としての人間と孤立した個人としての人間とは別なのである」(七575) と、純粋な個人と国民とのその役割を峻別している。

福田は「人格が仮説なら、国家も国民も当然仮説であり、フィクション（仮定・作り物）である。(……) 一般の日本人は、自分の子供が戦争に駆り立てられ、殺されるのが厭だからと言って、戦争に反対し、軍隊に反発し、徴兵制度を否定する。が、これは「母親」の感情である。その点は「父親」でも同じであろうが、「父親」は論理の筋道を立てる。国家というフィクションを成立させるためには、子供が戦争に駆り立てられるのも止むを得ないと考え、そのための制度もまたフィクションとして認める。が、彼にも感情はある。自分の子供だけは徴兵されないように小細工するかも知れぬ。私はそれもまた可と考える。「父親」の人格の中には国民としての仮面と親としての仮面と二つがあり、一人でその二役を演じ分けているだけの事である。そして、その仮面の使い分けを一つの完成した統一体として為し得るものが人格なのである」(七535) と、人間がもつ利己主義に基づく私心を「母親」、私心とともに人間が有する国家などの公に奉仕したいという公共心を「父親」とそれぞれ形容しているのである。人間は親子間の愛情という私心と同時に国民という公共心をも有しており、その公共心がフィクションとしての国家への奉仕を可能とする。「一人でその二役を演じ分けている」というのは、私心と公共心という二面性を適宜使い分けている、と言い換え可能かもしれないが、私心に傾く感情を制御し、国民という役割を演じ、国家というフィクションに仕えることを可能ならしめるものとしたということができるのではないだろうか。

福田は「フィクションは虚像ではない。堅固な建造物である。フィクションに適応し、これを維持しようという努力は人格を形成する。逆に言えば一人一人の人格がその崩壊を防ぐための努力がフィクションを作りあげ、これを堅固なものに為し得るのだ。が、虚像への適応を強いれば、ソフトウェアである心はコンシアンス（良心・自覚）への求心力を失い、人格の輪郭から外へ沁み出し、空のコップのような透明人間になってしまう。それはもはや人格とは言い難い、人格の崩壊であり、精神の頹廃である」(七537) と、フィクションという本来は虚像であるものが、虚像の域を脱し、堅固な建造物た

り得るためには、フィクションとは決して絵空事ではなく、受動的に与えられるものでもその役割を強制されるものでもなく、個々人が自らの役割を能動的に選び取り、その公共心に基づいた役割を的確に演じることによって、達成し得るものであると人格の役割を重視している。

福田は「社会は全体であり、個人はその部分である。この命題はだれにもわかりやすい。が、その逆はどうか。個人が全体であり社会はその鏡に映った断片である。それも真理なのです」と述べた上で、「かりに社会が目的、個人が手段とすれば、両者の位置が転倒することもありうるのです。というよりは、人間の生きかたとしては、そのほうが健全」（三七六「個人と社会」『中央公論』1955年8月号）であると、一般的な保守主義者の認識とは異なり、個人と社会の関係は固定的なものではなく、その主従関係が逆転し、個人が社会の主となる場合もあり得るとの見解を示している。

さらに福田は社会学についても以下のように言及する。「社会学にはもともと私の言う個人的自己の発想は無い。(……) 集团的自己、或いは集団における個人の確立という意識に囚れ、個人的自己、純粹自我、即ち孤独なる人間というものの入り込む余地は社会学には全く無い。プラグマティズムも同様である」と述べ、さらに「もし、彼等が孤独なる個人という事を考えるとすれば、集団に適応し損った失意のマイナス面でしか考えぬであろう」（七五七六-五七七）と、清水の専門が社会学とアメリカのプラグマティズムであることに関連して、福田の主張する個人としての自己確立が、そもそも論として清水には困難な思想であり、清水の専門学問分野からの個人についての考察の限界を指摘している。

2.2 良心と個人（消費者、職人、農民という個人）

前節では、福田は清水の集団の中に埋没してしまうような脆弱な個人観に懐疑的であり、それ故、集団を造上げる集团的自己の原動力を個人的自己という強い個の存在に求め、その存在の必要性を説いた、ということ考察した。そして、本節では、前節で福田が求めた強い個という存在の拠り所とするものとは何かという観点から、「良心」について考察する。福田は、「自分を越えた大きなもの」の存在に支えられた強い個の存在を重視しており、そして、強い個を支える原動力になり得るのが「良心」であると考えている。

福田は良心について、「善き国民として「自分を越えたもの」即ち国家への忠誠心を持たなければならない。同時に、善き人間として「自分を越えたもの」即ち、良心への忠誠心をも持たなければならない、その両者の間に対立が生じた時、前者は良心に賭けて後者と対立する自由がある」（七五七七）（原文のまま引用。「後者は良心に賭けて前者と対立する自由がある」だと思われる。）としている。そして、善き人間という存在を担保し得るものとして以下のように述べている。「前者の忠誠心は目に見える仲間、同志の集団に支えられているのに反して、後者の忠誠心は、目の前には見えない、後ろから自分を押して来る生の力の自覚に対する強烈な意識そのものを信ずる以外に法は無い」とした上で、「過去と黙約を取交している以上、連続性、一貫性は自ずと保たれているからである」（七五七七）と述べているが、これはどのように解釈

したらよいのであろうか。

良心は善き人間という存在を支える原動力であり、個人の二面性である他方の善き国民というフィクションとしての存在と善き人間が利益相反した場合、善き人間という存在は、善き国民という存在のように目に見える明確な後ろ盾を有しないという問題がある。さらに、善き国民のように国家への忠誠心というような明確な忠誠の対象をみつけるのも困難である。しかし、福田は、「過去との黙約」によって、「連続性、一貫性」を自ずと保ち得るとした。

福田の「自分を越えたもの」としての「良心への忠誠心」、「過去との黙約」による「連続性、一貫性」というような考え方は、伝統的な保守主義観に根差しているとみられるが、しかし、福田は「私の生き方ないし考え方の根本は保守的ではあるが、自分を保守主義者とは考えない」（五437「私の保守主義観」『読書人』1959年6月19日）と自身が保守主義者であることを否定している。

福田は「個人として最も信じていないのは私自身である」（七534）と、伝統的な保守主義観である人間の理性にたいする懐疑、そしてその懐疑は他者のみならず自己にも及ぶといった思想性を示し、さらに「保守的な生き方、考え方というのは、主体である自己についても、すべてが見出されているという観念をしりぞけ、自分の知らぬ自分というものを尊重することなのだ」（五439）と、自己の主体性にすら慎重な姿勢を示している。

この考え方の根底には、「自分を越えたもの」としての良心への忠誠心があり、そして、良心の基準というものは、知識人が一朝一夕に考えて導き出せるものではなく、過去と黙約した個人が、いわば過去の歴史の叡智から窺い知ることができるようなものであり、その意味で伝統的な保守主義者観に根差した過去の歴史との謙虚で真摯な対話によって成り立っているのが福田の思想である、と論点整理できるように思われる。ここで、やや抽象的とも思える個人と良心の思想のイメージを具体的に与えているのが職人という存在であり、職人により福田の個人観が形成されていると思われるため、以下に消費と生産を通しての個人観について考察する。そもそも福田自身も「過去との黙約」について福田は「自己欺瞞だと言われれば、それまでだが」（七577）と一定の留保をおいているように、それは具体的に語り得るのが非常に困難なものであり、「過去との黙約」によって「連続性、一貫性」を保つ、というのはどうしても抽象論に傾かざるを得ない考え方であると思われるが、福田に「過去との黙約を取交す」個人という思想上の具体的な存在のイメージを与えているのが職人、あるいは農民という存在であろうと思われる。

福田の個人観が凝縮された言説に「消費は人を孤独に陥れる」（五267「消費ブームを論ず」『紳士読本』1961年6月創刊号）というものがある。この時代背景として、前年に60年安保闘争の大混乱の中で岸首相が退陣し、後を受けた池田首相による所得倍增計画に代表される経済政策重視、その果実として、日本が高度経済成長段階に入るまさにそのとば口の経済的豊かさを得て、人々がいかに消費生活を謳歌するかといった時代の雰囲気の中で福田は、あえて消費主義に警笛を鳴らしたのは炯眼であったといえるであろう。

福田は「消費が目的で生産が手段だという今様の考え方である。（……）」

家庭内のあらゆる生産手段を雑用と称して最小限に切捨て合理化して、その後何が残ったか、おたがいに相手に付合う切掛けもよすがも失ってしまったのではないか。人間は生産を通じてでなければ付合えない」（五266-267）と消費に疑義を向けているのにたいして生産を重視している。

このように生産を重視していた福田は、職人について以下のように述べている。「職人の技術が近代化の過程でそれぞれ処を得る様な文化感覚、それは言葉で言うのは易しいが、実際はなかなか難しい事です」（六37「伝統技術保護に関し首相に訴う」『潮』1966年四月号）と、近代以降における職人という存在の困難さを指摘した上で、「私が職人を敬愛するのは、彼等の仕事に対する良心、というよりはその愛情に頭が下るからです。それは一体何処から来るか。簡単な事です。それは彼等が物を扱い、物と付合っているという、ただそれだけの事です」（六39）と、生産を重視していることを裏付ける言説であるが、それと同時にこの福田の見解は、人間にとって自由とはなにかという問題ともかかわってくると思われる。福田は「私たちが真に求めているものは自由ではない。（……）自由ではなくて必然性である。（……）私たちが欲しているのは、自己の自由ではない、自己の宿命である」（三525-527「人間・この劇的なもの」『新潮』1955年7月号-12月号、1956年2月号-5月号）と述べている。職人たちの多くは、親からあるいは先祖代々世襲としてその職を受け継いでいると思われ、そこには多数の選択肢の中から自己の職業を選択するというものではなく、家業という唯一の選択肢にたいして、これしかないという思いから職人の道を選んでいるのであろうが、かといって彼らはとくに不自由を感じているわけではなく、能動的に自己の宿命を受けいれていると思われ、福田の職人への敬愛には言外にこういった主体性を持った強い個の側面が含まれているのであろうと思われる。

職人が「自己の宿命」を「能動的に」受け入れているという反転構造、この構造は保守や左派といったイデオロギー的対立軸に還元できない福田の思想構造と密接に関連していると考えられる。

福田は「物と附合い、物から物を造る百姓や職人の生き方を唯々古めかしいものと軽視し、物を処理する商人や経営者の生き方にのみ近代化、合理化の方向を見出して来たのが間違いの因なのです」（六42-43）と述べている。

福田が重視する農民や職人の「物と附合い、物から物を造る」ということは、農民であれば農産物、職人であれば伝統工芸物などの生産物、そしてその背後には、農産物、伝統工芸物をつくり出す土地、その土地のコミュニティー、長い歴史、風土といったものが存在している。福田は、個人を重視しているが、その個人観は、消費者のようないわば匿名としての個人を指しているのではなく、どこそこの村民の農産物、伝統工芸物を作るという役割を果たしている農民、職人、そしてその農民、職人の個人的自己を担保するものとして、その土地の長い歴史や伝統に拠り所をもとめ、そのようないわば実体性のある個人を重視していたともいえるのではないだろうか。

以上、本節において考察した良心と職人、農民との関連性であるが、善き

人間という存在は、善き国民という存在と異なり、具体的に目に見えるものの支えがなく、「自分を越えたもの」に依拠しなければならない。福田は「自分を越えたもの」として「良心への忠誠心」を重視している。

また、職人、農民という存在は、消費者という匿名性の個人と対をなす実体性のある個人である、という言い方が可能な存在であると思われるが、その実体性の源泉は職人、農民個々人を越えた「自分を越えたもの」の存在に支えられているといえ、その意味で良心と職人、農民の接続性を見出し得ると考える。

先述の「善き国民として「自分を越えたもの」即ち国家への忠誠心を持たなければならない。同時に、善き人間として「自分を越えたもの」即ち、良心への忠誠心をも持たなければならない」といった対比は、前者が国家という具体的で目に見える制度的全体性を拠り所としているのに対し、後者は抽象的で目に見えない「良心」というものを拠り所としている。

後者が「忠誠」の対象としてあげる「良心」というのは、一見したところ目に見えない抽象的なものであり、職人や農民は形のないものに依拠しているようにも見えるが、しかし、職人や農民という生産者にとってはまさに具体的なモノや技術によって「連続性、一貫性」が保たれているといえ、福田は前者の国家制度の具体性よりも、後者の具体性を重視したといえることができるのではないだろうか。

以上見てきたように、福田の思想は「自分を越えたもの」を重視している点では伝統的な保守主義者観に根差しているといえるが、それと同時に個人をも重視している。ここには、全体に埋没してしまうような脆弱な個ではなく、強い個の確立を求める一方で、それが「自分を越えたもの」にこそ支えられるという逆説がある。以上の点をふまえて、以下に福田の思想について筆者の結論を述べる。

結論—私を超えた大きなものによって成り立つ福田の個人観、その両義性

橋川は日本の保守主義について、「保守と反動の区別は社会的実体と結びついて理解されるような条件がなかった」²⁰と述べている。橋川の分析にあるような理由から福田は長らく保守反動思想家と誤認されてきたといえるが、本稿において考察してきたように福田は個人を重視する思想家であった。

福田の個人観は、マルクス主義やファシズムのように全体の中に埋没してしまうような脆弱な個人観ではなく、リベラリズムのように個人の自由を重きをおき、個人の自由に国家や伝統を劣後させる個人観でもない。それは、消費者に代表される匿名性の個人と相対する職人、農民にみられるような生産という確かな実体性を有し、能動的に自己の宿命を選びとっていく主体性を持った強い個人を重視していた、というように筆者は福田の個人観を捉える。

そしてその実体性や主体性の源泉になるのが、私や人智を超えた「大きなもの」であって、その力によって強い個たり得る、と福田は考えている。集団に埋没することのない強固な個の確立と、それを支えるべき「大きなもの」

という福田の思想の持つ両義性こそが、福田に対する理解を両極に分解してしまう最大の理由ということがいえるのではないだろうか。

福田の思想の両義性ということの証左として、序章でみた保守派知識人の福田賛辞の言説のほかに、保守派の知識人とは相対する思想を有するとみられる柄谷行人は「私が福田恒存を最初に読んだのは1960年の秋であったが、自分と政治的立場が違うにもかかわらず、何の違和感も覚えなかった。(……)福田恒存が死んで悼むのはたぶん保守派ばかりであろう。しかし、彼がもっていたような臨界的＝批評的精神はそこにはないということが出来る」²¹と、平衡感覚の思想家として福田を評価するとともに、保守派の側からの福田賛辞、福田理解だけでは回収し得ぬ思想家であったと、保守派知識人とは反対の立場からの肯定的な福田理解を示している。

最後に福田の個人観をさぐる上で少し言及しておきたい論点がある。歴史認識において、保守派の多くは戦前の日本が置かれた状況に積極的な意義を見出し、保守派は大東亜戦争肯定論者と捉えられる傾向がみられるが、それに反して、福田は戦前の日本についてきわめて懐疑的、批判的である。それは何故であろうか。

福田は「そういう孤独な人間に事件は起らない。事件はすげなく私のそばを素通りして行ってしまう。戦争もそうだった。あれほど世界を動かした大戦争だが、私の関心は全くそこにはなかった」(一658「覚書I」)と、まず戦争への無関心を述べた上で、「現実の醜悪さ、人間性の奥深くにひそむエゴイズム—こうしたものに直面したとき、ひるがえって正義や善の観念にすがりつくことしか知らぬひとびとにむしろ強い反発を感じるのだ。近代日本にあっては、文化のみならず政治もまた、この人間性の悪とエゴイズムとに気づかぬようにふるまってきた」(一540「民衆の心」『展望』1946年3月号)と述べており、戦前のみならず、近代日本においては真の自己が確立されておらず、そのため人間性に内在するエゴイズムを直視することを回避し、結果、強固な個が確立されてこなかったという福田の個人観が、戦前の日本、大東亜戦争を肯定し得ない最大の根拠であると考えられ、本稿の主題との接続性が認められると思われる。

第2章で考察した清水の論文、清水批判の福田の論文について、保守派とみられる渡部昇一は「清水さんはかつての平和運動から帰って来たわけだ。それなのに(……)福田さんが喜ばないというところに、ぼくなんかちょっと奇妙な感じをもちますね。(……)あの清水さんがいまは親米派になっている。ぼくは「ああ、いいこっちゃ」と思いますがね」²²と批評している。福田の思想の特徴は、この渡部評にみられる保守や左派といったイデオロギー論に回収し得ないところにあるといえるであろう。

福田の清水批判の骨子は、清水の国家観に個人という要素が希薄、あるいは欠けているからであり、それは、清水が従前の進歩主義から右転回し、表面的には福田の思想に接近してきたかのようにみえても、それによって妥協し得るものではなく、左右の思想を問わず、国家の中に埋没してしまうような脆弱なアトムとしての個人に陥ってしまう個人観にたいして、福田の思想は個人なき国家観を懐疑し嫌悪した。

▶ 21 柄谷行人「平衡感覚—福田恒存を悼んで」『新潮』1995年2月

▶ 22 西義之・渡部昇一・小田晋「核の選択」から「夕暮まで」『諸君』1980年12月 26頁

▶23 間宮陽介『丸山眞男 日本近代における公と私』筑摩書房1999年 151頁

福田は個人の存在を重視した個人主義、さらには徹底した個人主義者であって、強い個の確立を希求していたとみられる。その意味では一般的な保守主義者とは異なる思想を有していたといえよう。序章でみた宇野による福田と丸山の共通性という、近代的な主体性を有した強い個を求めた丸山²³と、職人に代表される生産という確かな実体性を有し、能動的に自己の宿命を選びとっていく主体性を持った強い個を敬愛した福田の類似性が見出せるという言い方ができるかもしれない。

しかしながら、他方において福田が丸山と異なり、個人の主体性だけに還元し得ず、保守主義者とみられるゆえんは、人間の意志程度のものですべてを決せられるものではない、という強烈な自覚を持っているところに帰するであろう。人間の理性には限界があり、個人は個人だけでは成り立つものではなく、個人の限界をも自覚しており、その自覚からたんなる「私個人を超えた大きなもの」として、過去の歴史に根差した言葉や自然を重視していたというところにも、先にみた福田の思想の両義性を見いだし得る、ということができよう。

福田は過去の歴史に根差した言葉や自然を重視していたことから、一見したところでは、福田はコミュニタリアンであったとの評価も妥当なもののように思われる。小林正弥は「コミュニタリアニズムでは、「善き生」という精神的・倫理的・道徳的観念は家族・地域コミュニティなどの伝統的なコミュニティで培われることが多いから、個人だけではなく、コミュニティも重視することが多い」²⁴と述べている。

▶24 菊池理夫・小林正弥『コミュニタリアニズムの世界』勁草書房2013年 16頁

たしかに福田には、長い時間と歴史を経て形成された共同体を重視し、伝統技術保護をはじめとして、共同体と親和性をもっている言説も垣間みられ、一定の割合で共同体を重視していたと思われるが、しかしながら、福田の思想の逆説的なのは、共同体に相對すると思われる個人の存在を重視していたことから、コミュニタリアンという評価だけに回収し得ず、畢竟するに、福田は共同体に依拠する、という九十九匹の側面とともにいわば共同体から孤立して、自己の孤高を保ちつつ個人的自己の超越を希求する、という一匹の側面をもあわせ持ったところに福田の思想の本質があると思われる。

80年代以降の保守派は、本稿でみた清水にみられるごとく国防論を喧伝し、経済的には新自由主義・グローバリズムを推奨する論者が現在に至るまで隆盛であるが、福田保守主義は、国防力強化を喧伝し国家意識を高揚させ左派を批判するような単に反左翼に回収されるような保守主義ではなく、自由放任な市場原理、競争至上主義を推奨するよりはむしろ警戒し、「リベラルをも内包した保守主義」あるいは「穏健な保守主義」とでも形容し得るような思想であり、この福田の思想は、序章でみた福田賛辞の言説をしている西部や中島にその思想の系譜がみられると考えられるが、保守とリベラルといった二項対立だけでは推しはかれない思想であるとも思われ、この福田思想の継承についての研究も今後深めていきたい。

以 上

参考文献

- 福田恒存『福田恒存在全集 第一巻～第八巻』文藝春秋1987-1988年
福田恒存・浜崎洋介編『保守とは何か』文春学藝ライブラリー2013年
福田恒存・浜崎洋介編『国家とは何か』文春学藝ライブラリー2014年
福田恒存・浜崎洋介編『人間とは何か』文春学藝ライブラリー2016年
宇野重規『保守主義とは何か』中公新書2016年
小熊英二『民主と愛国』新曜社2002年
柄谷行人「平衡感覚―福田恒存を悼んで」『新潮』1995年2月
川久保剛『福田恒存』ミネルヴァ日本評伝選2012年
菊池理夫・小林正弥『コミュニタリアニズムの世界』勁草書房2013年
清水幾太郎「核の選択」『諸君』1980年7月
清水幾太郎『清水幾太郎著作集17』講談社1993年
先崎彰容『ナショナリズムの復権』ちくま書房2013年
中島岳志『保守と大東亜戦争』集英社新書2018年
西義之・渡部昇一・小田晋「核の選択」から「夕暮まで」『諸君』1980年12月
西部邁・西尾幹二「福田恒存からアメリカまで」『発言者』1995年1月
西部邁『ニヒリズムを超えて』日本文芸社1989年
西部邁・中島岳志『保守問答』講談社2008年
西部邁『日本の保守思想』ハルキ文庫2012年
橋川文三編『保守の思想 戦後日本思想体系7』筑摩書房1968年
浜崎洋介『福田恒存思想の〈かたち〉』新曜社2011年
間宮陽介『丸山眞男 日本近代における公と私』筑摩書房1999年
丸山眞男『日本の思想』岩波書店1961年
森村進『自由はどこまで可能か＝リベタリアニズム入門』講談社現代新書2001年
盛山和夫『リベラリズムとは何か』勁草書房2006年
安丸良夫「戦後イデオロギー論」『講座日本史8』東京大学出版会1971年
山田宗睦『危険な思想家 戦後民主主義を否定する人びと』光文社1965年 15頁

(2019年4月10日受理、2019年7月29日採択)